

医心 伝心

エピペン処方について

富山県医師会理事 大橋 直樹

ハチ毒、食物アレルギー、薬物アレルギーなどによっておこされた免疫反応に対する治療には軽い場合には抗アレルギー剤、ステロイドの投与なども考えられるが、重症でアナフィラキシーが疑われる場合にはこれらでは不十分であり、アナフィラキシーを予防、また重篤化を改善するためにはエピネフリンの投与が不可欠であるとされている。注射用のエピネフリンは1ccアンプルとして販売されているが、現場でいざエピネフリンをアンプルから注射器に吸い込み、患者の体重で量を計算し、注射量を設定して注射するのは極めて困難であり、目の前に様態が悪くなった患者がいる場面では指が震えてしまい大変だとする体験談もあった。この点を解決したのがアドレナリン自己注射液（商品名エピペン）である。日本では1995年に治験扱いとして輸入され国有林職員に持たせたのが始まりだそうで、2003年に医薬品として許可され2011年に保険適応になった。私はスギ舌下免疫療法を始めるにあたり、免疫療法の副反応としてアナフィラキシーについて数回にわたり富山県耳鼻科地方部会の講演会で紹介されたので、その必要性は理解しており、AED、AMBU バッグセットなどとともに用意した。

エピペンは医師であれば自院での使用は可能であるが、患者さんに持たせるために処方する場合には講習会を受け簡単な試験に合格しなければならない。私は舌下免疫療法講習会のあとにエピペ

ン講習会があり、患者さんへの処方も可能になったが、販売会社がファイザーからマイランに変更になったこともあり再度 E-learning を受け今度は HP にも登録した。

一度ハチに刺された経験がある人の20%に特異的 IgE が産生されるそうで、林業会社の社員など山で働く人には持たせる必要があると思われる。近年問題となっている学校給食での食物アレルギー対策であるが、食物アレルギーの子供にだけにアレルギー物質を含まない特別な食事を用意するのではなく、そのクラスまたは学校すべての給食をアレルギー物質が含まない食事にするといったことも実践されている。食物アレルギー対策には子供にも学校にもエピペンを持たせる必要があり使用を躊躇してはならない。

なおエピネフリン（アドレナリン）の発見は高岡市出身であり電源開発で宇奈月温泉とも縁の深い、タカジアスターゼを発見した高峰讓吉によるものである。アドレナリンは1900年に発見され100年以上使われている。